

18 元代の三皇廟について

秦^{しんの} 玲子

三皇廟とは、読んで字の如く、三皇を祭った廟である。三皇とは誰を指すかについては、中国古来諸説あったが、元代の三皇廟においては、伏羲・神農・黄帝の三者をいう。顧頡剛・楊向奎「三皇考」（呂思勉・童書業編『古史辨』七冊中編、一九四一年）によると、この三者を組み合せたのは、西晋の皇甫謐『帝王世紀』、及び前漢の孔安国によって書かれたと久しく言われ、後の清朝の考証学者に魏晋における偽作なりと立証された『尚書』序等であった。唐初に『尚書』が五経の一つに定められるのに伴い、この三者の「三皇」としての地位は次第に定まった。

三皇が一セットになって国家によって祭られたのも、唐代が初めてである。『唐会要』卷二十二に、「(天宝)六載(七四七年)正月十一日勅、三皇五帝、創物垂範、永言龜

鏡、宜有欽崇。三皇、伏羲、神農、軒轅。五帝、少昊、瑞珎、高辛、唐堯、虞舜。…仍以春秋二時致享共、置令丞、令太常寺檢校。」とあるように、三皇は五帝とともに国家によって祭られた。ここで留意したいのは、三皇が文明の祖として祭られていることである。この文明の祖としての三皇の祭りは、五代・宋には受け継がれなかったが、金に受け継がれた。ところが元になると、三皇廟は医学校と組み合わせて、医薬の神を祭った廟として全国に設置されることになる。『元史』卷七十六に「元貞元年(一二九五年)、初命郡県通祀三皇、如宣聖釈奠礼。太皞伏羲氏以勾芒氏之神配、炎帝神農氏以祝融氏之神配、軒轅黄帝氏以風后氏、力牧氏之神配。黄帝臣兪附以下十人、姓名載于医書者、從祀兩廡。有司歲春秋二季行事、而以醫師主之。」とあり、三皇は歴代十人の名医と共に祭られたことが分かる。儒教の学校にある孔子及び弟子の廟(宣聖廟)の例にならったことであった。

元代の制度史は、それに先行する宋代と比べても資料が乏しく、三皇廟についても、『元史』『元典章』といったオーソドックスな制度史的資料からは、関連する幾つ

かの皇帝の詔の概略が分かるだけで、その詔が出るに到った政治的・社会的プロセスについてはよく分からない。池内功「元朝の郡県祭祀について」(野口鐵郎編『中国史における教と国家』雄山閣出版、一九九四年)や趙元玲「三皇與醫學——三皇廟略考」(『醫學與中國社會』學術研討會發表論文、中央研究院歷史語言研究所、一九九七年)といった先行研究がそれを補うために主に使ってきたのが、廟の建設・改修の際にその脇に建てられた石碑の碑文(三皇廟記)である。演者が調査したところ、従来分かっていたより多めの、三十数篇ほどの碑文が士大夫の文集や地方志の中に残っていることが判明した。

それらの碑文から確認できるのは、第一に従来も指摘されてきたように、元代的三皇廟以前に、文明の祖としての国家による祭りとは別に、医者が私的に三皇を医薬の祖として祭ってきたことである。目新しい史料としては、元初に書かれた元好問(一一九〇—一二五七)の「三皇堂記」(『遺山集』卷三十二)が挙げられよう。これは、趙国器という医者が建てた三皇堂に付された碑文であり、私的な三皇の祭りを最も直接的に証拠づける文章で

あると思われる。第二に、建設・改修の時期を調べてみると、やはり圧倒的に前述の元貞元年の詔が出た後の場合が多く、三皇廟制度の実際効果がある程度確認できる。

さらに興味深いのは、医学校・三皇廟の記載が地方志に占める割合である。例えば寧波の場合、宋以前に編纂された地方志には三皇廟が全く現れず、明中期以降のそれには簡単に一行程度の記載しかないのに対し、元代に書かれた『延祐四明志』卷一四には長々と医学校・三皇廟に関する記載がある。モンゴル人による王朝は、より実用的な学問としての医学や工芸を推進した。三皇廟に関する多くの記載は、元代における医学の社会的文化的重要性を示唆していると思われる。

(日本学術振興会／北里研究所東医研医史学研究所)